

# 広がる「やさしいバス」

## 静岡、長野で市場業者も協力

地域内で農産物の共同配送を行う「やさしいバス」。直売所や商業施設などに設置した「停留所」を2台冷蔵トラックが巡回し、生産者の出荷や実需者の受取りができる。2016年に静岡県の委託事業として始まり、現在は農業ベンチャー「エムスクエアラボ」（加藤百合子社長、静岡県牧之原市）の子会社「やさしいバス」が事業を手掛ける。生産者・実需者の双方にメリットがあり、地域振興にもつながることから各地に広がっており、8月末からは神奈川県でスタート、今月からは長野県で実証試験が開始した。この取組みに卸売市場業者や青果流通業者も注目。停留所などとして協力する例も出てきている。

やさしいバスの利用者は生産者、レストランが中心。専用のインターネットサイトで取引が成立すると、生産者は最寄りの停留所に出荷、実需者は都合の良い停留所で受取る。生産者は出荷に要する時間や作業を軽減できる。

き、実需者は宅配便よりも低価格（静岡11コンテナ350円）で、荷を受取ることができる。生産者との取引が深まれば、サイトに掲載した商品以外のサイズ、ロット、品目などのオーダーも可能だ。

調達した定番品をラフラスして飲食店に供給する。さらに、これまで手薄だった県東部でも市場の卸会社の協力が得られ、配送エリアの拡大が見込まれている。

長野県の実証試験は、安曇野市を帰着地点として松本市、塩尻市など10か所の停留所を巡回。

「この地域は宿泊施設が多く、旅館組合も参画している。新鮮な地場産農産物を（観光客に）供給できると期待している」（加藤社長）という。ここでも市場業者が協力する予定だ。実証期間は年内までで、その後は民間事業として継続していく。

静岡県では富士宮市から浜松市間に15の停留所があり、2ルートに分かれて運行。合計で生産者約120者、実需者約150者が利用する。停留所として、市場の仲卸と場外の青果流通業者がそれぞれ場所を提供。静岡市中央卸売市場の仲卸・東海青果（赤井毅社長）では、店舗の冷蔵庫横のスペースを停留所とし、同社もやさしいバスの生産者から仕入れを行う。その理由として、生産者の直売志向で市場に地場産青果物が入荷しにくいことを挙げる。

一方、場外の青果流通業者では生産者が出荷した地場産青果物に市場で

集荷力向上にも

「共同配送のフォーマットはすでに構築されているので、さまざまに応用できる」（加藤社長）といい、国内だけでなく海外からも問合せがあるという。

神奈川県での取組みでは、地域のスーパーが利用。地元の「湘南野菜」「鎌倉野菜」に静岡産や長野産の野菜を加え店舗間配送を行う。この場合

はインターネットでの取引は行わず、共同配送のみを利用する。

産地では生産者の高齢化や担い手不足が深刻化し、市場業者の産地支援が求められるものの、市場業者も人手不足で効率化を図りたいところ。こうした中、加藤社長は「やさしいバスは集荷力の向上、生産者支援にもつながるのでは」と見ている。

生産者と実需者を結び、地域の小口配送のインフラとしても期待される「やさしいバス」

